

「スッキリわかる線形代数」(初版, 第2刷) 正誤表

	誤	正
p.18, 例 1.2 の前に追記		これらは英語の語順になっていることに注意してください。例えば、上の例では「For any $y \in Y$, there exists $x \in X$ such that $y = f(x)$ 」となっています。
p. 18, 例 1.2 の解法テクニ ック	文書をすぐに記号で表し, 全体の意味が通じるようにせよ。	文書をすぐに記号で表し, 英語の語順 で全体の意味が通じるようにせよ。
p.20, 定義 1.8 の前	写像を, 全射, 単射, 全単射の3つに分けることにします。	写像を 分類 するため, 全射, 単射, 全単射 という概念を導入します。
p. 27, 基本ベ クトルの定義	$e_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ \vdots \\ 0 \end{bmatrix}, e_2 = \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ \vdots \\ 0 \end{bmatrix}, \dots, e_n = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ \vdots \\ 1 \end{bmatrix}$	$e_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \\ \vdots \\ 0 \end{bmatrix}, e_2 = \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \\ \vdots \\ 0 \end{bmatrix}, \dots, e_n = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ \vdots \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix}$
p.33, 下から 2行目	平たく言えば「縦×横」のように定義しているので,	平たく言えば「 横×縦 」のように定義しているので,
p.40, 中程	$A_{11}B_{11} + A_{12}B_{21} =$ $A_{11}B_{12} + A_{12}B_{21} =$	$A_{11}B_{11} + A_{12}B_{21} =$ $A_{11}B_{12} + A_{12}B_{22} =$

	誤	正
p.42, 定義 2.18	行と列が等しい行列, $n \times n$ 行列を n 次正方行列という.	行と列の 数 が等しい行列, $n \times n$ 行列を n 次正方行列という.
p.43, 定義 2.21	自然数 i, j を $1 \leq i \leq m, 1 \leq j \leq n$ とするとき, n 次正方行列で, その (k, l) 成分が $\delta_{ki}\delta_{jl}$ であるような行列を E_{ij} で	自然数 i, j を $1 \leq i \leq m, 1 \leq j \leq n$ とするとき, n 次正方行列で , その (k, l) 成分が $\delta_{ki}\delta_{jl}$ であるような行列を E_{ij} で
p.43, 中程	$E_{11} = \begin{bmatrix} \delta_{11}\delta_{11} & \delta_{12}\delta_{12} \\ \delta_{21}\delta_{11} & \delta_{21}\delta_{12} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 0 \end{bmatrix}, \quad E_{12} = \begin{bmatrix} \delta_{11}\delta_{21} & \delta_{11}\delta_{22} \\ \delta_{21}\delta_{21} & \delta_{21}\delta_{22} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{bmatrix}$	$E_{11} = \begin{bmatrix} \delta_{11}\delta_{11} & \delta_{11}\delta_{12} \\ \delta_{21}\delta_{11} & \delta_{21}\delta_{12} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 0 \end{bmatrix}, \quad E_{12} = \begin{bmatrix} \delta_{11}\delta_{21} & \delta_{11}\delta_{22} \\ \delta_{21}\delta_{21} & \delta_{21}\delta_{22} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{bmatrix}$
p.44, 例 2.6	次が成り立つことを示せ. $E_{ij}E_{kl} = \begin{cases} E_{il} & (j = k) \\ 0 & (j \neq k) \end{cases}$	次が成り立つことを示せ. $E_{ij}E_{kl} = \begin{cases} E_{il} & (j = k) \\ 0 & (j \neq k) \end{cases}$
p.47, 定理 2.6	さらに, A を $m \times n$ 行列, B を $n \times r$ 行列とすると ${}^t(AB) = {}^tB{}^tA$ が成り立つ.	さらに, A を $m \times n$ 行列, B を $n \times r$ 行列とすると (4) ${}^t(AB) = {}^tB{}^tA$ が成り立つ.
p.51, 演習問題 2.11	A と B を n 次正方行列とする.	A と B を n 次 正則 行列とする.
p.62, 例 2.14 の解法テクニック	$R_\theta^{-1} = {}^tR_\theta$ を利用せよ.	$R_\theta^{-1} = {}^tR_\theta$ あるいは $R_\theta^{-1} = R_{-\theta}$ を利用せよ.
p.57, 例 2.12 の前	定理 2.12 の (2.12) というのは, ベクトル x と y のなす角は, Ax と Ay のなす角と等しいことを意味します. また, (2.12) において, $x = y$ とすると, $ Ax ^2 = x ^2 \iff Ax = x $ となりますから, Ax と x との長さが等しいことが分かります. つまり, 2 つのベクトル x と y に直交行列 P をかけて Px, Py としてもその長さや角度は変わらない, ということを定理 2.12 は示しているのです.	(2.12) において, $x = y$ とすると, $ Ax ^2 = x ^2 \iff Ax = x $ となりますから, Ax と x との長さが等しいことが分かります. また, このとき, $\frac{(Ax, Ay)}{ Ax Ay } = \frac{(x, y)}{ x y }$ となりますから, ベクトル x と y のなす角は, Ax と Ay のなす角と等しいことが分かります. つまり, 2 つのベクトル x と y に直交行列 P をかけて Px, Py としてもその長さや角度は変わらない, ということを定理 2.12 は示しているのです.

	誤	正
p.62, 解法テクニック(ベクトルの回転)	ベクトルを負の方向(時計回り, 右回り)に回転させるときは, $R_\theta^{-1} = {}^t R_\theta$ を利用せよ.	ベクトルを負の方向(時計回り, 右回り)に回転させるときは, $R_\theta^{-1} = {}^t R_\theta$ や $R_\theta^{-1} = R_{-\theta}$ を利用せよ.
p.63, 先頭	(4) $x^2 + xy + y^2 = \frac{3}{2} \implies$	(4) 点 (x, y) を反時計回りの方向に 45° 回転した点を (X, Y) とすれば, $x^2 + xy + y^2 = \frac{3}{2} \implies$
p.63, ページの最後に追記	である.	である. なお, T_l が直交行列であることは, 例 2.14 と同様にして示すことができる.
p.73, 下から3行目	例えば, $(1,2,3)$ を $(3,1,2)$ と並べ替える置換 σ は	例えば, $(1,2,3)$ を $(1,3,2)$ と並べ替える置換 σ は
p.88, 定理 3.5 の証明	e_1, e_2 を基本ベクトルとすると $Ae_1 = \begin{bmatrix} a & b \\ c & d \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} a \\ c \end{bmatrix}, \quad Ae_2 = \begin{bmatrix} a & b \\ c & d \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} b \\ d \end{bmatrix}$ オリエンテーションを保つ方向, つまり, 左回りを正とし, Ae_1 と Ae_2 とのなす角を θ とする. そして, Ae_1 と Ae_2 を 2 辺とする平行四辺形の面積を S とすると $S = Ae_1 Ae_2 \sin\theta$ なので	e_1, e_2 を基本ベクトルとすると $Ae_1 = \begin{bmatrix} a & b \\ c & d \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} a \\ c \end{bmatrix}, \quad Ae_2 = \begin{bmatrix} a & b \\ c & d \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} b \\ d \end{bmatrix}$ であり, オリエンテーションを保つ方向, つまり, 左回りを正とし, Ae_1 と Ae_2 とのなす角を $\theta(0 \leq \theta < 2\pi)$ とする. そして, Ae_1 と Ae_2 を 2 辺とする平行四辺形の面積を S とすると $S = Ae_1 Ae_2 \sin\theta $ なので
p.96, 例 3.8 の前	一般に, 行列の積では $AB \neq BA$ ですが, 積の行列式では $\det(AB) = \det A \det B = \det B \det A = \det(BA)$ が成り立つことに注意しましょう.	一般に, 行列の積では $AB \neq BA$ ですが, 積の行列式では $\det(AB) = \det A \det B = \det B \det A = \det(BA)$ が成り立つことに注意しましょう.
p. 114, 定理 3.15	(直交性) $(a \times b, a) = (a \times b, b) = 0$	(直交性) $(a \times b, a) = (a \times b, b) = 0$
p.117, 定理 3.18(1) の証明	定理 3.15 より, $(a \times b, a) = (a \times b, b) = 0$ が成り立つので,	定理 3.15 より, $(a \times b, a) = (a \times b, b) = 0$ が成り立つので,

	誤	正
p.117, 定理 3.18(2) の証明	$\begin{aligned} \mathbf{a} ^2 \mathbf{b} ^2 \sin^2 \theta &= \mathbf{a} ^2 \mathbf{b} ^2 (1 - \cos^2 \theta) \\ &= \mathbf{a} ^2 \mathbf{b} ^2 - (\mathbf{a}, \mathbf{b})^2 \end{aligned}$	$\begin{aligned} \mathbf{a} ^2 \mathbf{b} ^2 \sin^2 \theta &= \mathbf{a} ^2 \mathbf{b} ^2 (1 - \cos^2 \theta) \\ &= \mathbf{a} ^2 \mathbf{b} ^2 - (\mathbf{a}, \mathbf{b})^2 \end{aligned}$
p.120, 間違いではないが, なるべく(4.5)の形になるように修正	<p>となります。最後に, 第2行を (-1) 倍すると</p> $\begin{cases} x + 2y + 3z = 1 \\ y + 2z = 0 \end{cases} \iff \left[\begin{array}{ccc c} 1 & 2 & 3 & 1 \\ 0 & 1 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{array} \right]$ <p>を得ます。最終的に, 変数の数は3つで, 方程式の数は2つということが分かりました。このときは, x, y, z のうち, いずれか1つは任意の値をとるものことができますから, $z = \alpha$ (ただし, α は任意の実数) とすれば,</p> $\begin{aligned} y &= -2z = -2\alpha \\ x &= 1 - 2y - 3z = 1 - 2(-2\alpha) - 3\alpha = 1 + \alpha \end{aligned}$ <p>となるので, これらが (4.1) の解となります。</p> <p>なお, もしも, 以上のような変形を行って, 例えば, 拡大係数行列が</p> $\left[\begin{array}{ccc c} 2 & -3 & 2 & 1 \\ 0 & 1 & -4 & 8 \\ 0 & 0 & 0 & 3 \end{array} \right] \quad (4.2)$ <p>となった場合, 対応する方程式は</p> $\begin{aligned} 2x - 3y + 2z &= 1 \\ y - 4z &= 8 \\ 0 &= 3 \end{aligned}$ <p>なので, これを満たす解は存在しません。</p>	<p>となります。最後に, 第2行の2倍を第1行に加えた後, 第2行を (-1) 倍すると</p> $\begin{cases} x - z = 1 \\ y + 2z = 0 \end{cases} \iff \left[\begin{array}{ccc c} 1 & 0 & -1 & 1 \\ 0 & 1 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{array} \right]$ <p>を得ます。最終的に, 変数の数は3つで, 方程式の数は2つということが分かりました。このときは, x, y, z のうち, いずれか1つは任意の値をとるものことができますから, $z = \alpha$ (ただし, α は任意の実数) とすれば,</p> $\begin{aligned} y &= -2z = -2\alpha \\ x &= 1 + z = 1 + \alpha \end{aligned}$ <p>となるので, これらが (4.1) の解となります。</p> <p>なお, もしも, 以上のような変形を行って, 例えば, 拡大係数行列が</p> $\left[\begin{array}{ccc c} 1 & -3 & 2 & 1 \\ 0 & 1 & -4 & 8 \\ 0 & 0 & 0 & 3 \end{array} \right] \quad (4.2)$ <p>となった場合, 対応する方程式は</p> $\begin{aligned} x - 3y + 2z &= 1 \\ y - 4z &= 8 \\ 0 &= 3 \end{aligned}$ <p>なので, これを満たす解は存在しません。</p>

	誤	正
p.122, 解法テクニック. 間違いではないが, 先頭の数字を1にする習慣をつけさせるために変更.	<p>拡大係数行列 $[A b]$ に行基本変形を施して, $\left[\begin{array}{ccc c} * & * & * & * \\ & * & * & * \\ & & * & * \end{array} \right]$ あるいは</p> <p>$\left[\begin{array}{ccc c} * & * & * & * \\ & * & * & * \\ & & * & * \end{array} \right]$ の形を作れ. もしも, $\left[\begin{array}{ccc c} * & * & * & * \\ & * & * & * \\ & & * & * \end{array} \right]$ となったら, 決して解は存在しない.</p>	<p>拡大係数行列 $[A b]$ に行基本変形を施して, $\left[\begin{array}{ccc c} 1 & * & * & * \\ & 1 & * & * \\ & & 1 & * \end{array} \right]$ あるいは</p> <p>$\left[\begin{array}{ccc c} 1 & * & * & * \\ & 1 & * & * \end{array} \right]$ の形を作れ. もしも, $\left[\begin{array}{ccc c} 1 & * & * & * \\ & 1 & * & * \\ & & * & * \end{array} \right]$ となったら, 決して解は存在しない.</p>
p.122, 例 4.1 の解答.(4.5) に形を合わせる.	<p>$\left[\begin{array}{cccc c} 1 & -1 & 0 & 1 & 5 \\ 2 & -1 & 2 & 1 & 8 \\ 0 & 1 & 3 & -1 & 2 \\ 1 & 0 & 3 & 0 & 7 \end{array} \right]$ $\xrightarrow[\text{第 1 行} \times (-1) + \text{第 4 行}]{\text{第 1 行} \times (-2) + \text{第 2 行}}$ $\left[\begin{array}{cccc c} 1 & -1 & 0 & 1 & 5 \\ 0 & 1 & 2 & -1 & -2 \\ 0 & 1 & 3 & -1 & 2 \\ 0 & 1 & 3 & -1 & 2 \end{array} \right]$</p> <p>$\xrightarrow{\text{第 3 行} \times (-1) + \text{第 4 行}} \left[\begin{array}{cccc c} 1 & -1 & 0 & 1 & 5 \\ 0 & 1 & 2 & -1 & -2 \\ 0 & 1 & 3 & -1 & 2 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{array} \right]$ $\xrightarrow{\text{第 2 行} \times (-1) + \text{第 3 行}}$ $\left[\begin{array}{cccc c} 1 & -1 & 0 & 1 & 5 \\ 0 & 1 & 2 & -1 & -2 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 4 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{array} \right]$</p> <p>より, $\begin{cases} x_1 = 5 + x_2 - x_4 \\ x_2 = -2 - 2x_3 + x_4 \\ x_3 = 4 \\ x_4 \text{ は任意} \end{cases} \text{ なので, } \begin{cases} x_1 = 5 + (-10 + x_4) - x_4 = -5 \\ x_2 = -2 - 8 + x_4 = -10 + x_4 \\ x_3 = 4 \\ x_4 \text{ は任意} \end{cases} \text{ である.}$</p>	<p>$\left[\begin{array}{cccc c} 1 & -1 & 0 & 1 & 5 \\ 2 & -1 & 2 & 1 & 8 \\ 0 & 1 & 3 & -1 & 2 \\ 1 & 0 & 3 & 0 & 7 \end{array} \right]$ $\xrightarrow[\text{第 1 行} \times (-1) + \text{第 4 行}]{\text{第 1 行} \times (-2) + \text{第 2 行}}$ $\left[\begin{array}{cccc c} 1 & -1 & 0 & 1 & 5 \\ 0 & 1 & 2 & -1 & -2 \\ 0 & 1 & 3 & -1 & 2 \\ 0 & 1 & 3 & -1 & 2 \end{array} \right]$</p> <p>$\xrightarrow{\text{第 3 行} \times (-1) + \text{第 4 行}} \left[\begin{array}{cccc c} 1 & -1 & 0 & 1 & 5 \\ 0 & 1 & 2 & -1 & -2 \\ 0 & 1 & 3 & -1 & 2 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{array} \right]$ $\xrightarrow{\text{第 2 行} \times (-1) + \text{第 3 行}}$ $\left[\begin{array}{cccc c} 1 & -1 & 0 & 1 & 5 \\ 0 & 1 & 2 & -1 & -2 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 4 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{array} \right]$</p> <p>$\xrightarrow{\text{第 3 行} \times (-2) + \text{第 2 行}} \left[\begin{array}{cccc c} 1 & -1 & 0 & 1 & 5 \\ 0 & 1 & 0 & -1 & -10 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 4 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{array} \right]$ $\xrightarrow{\text{第 2 行} + \text{第 1 行}}$ $\left[\begin{array}{cccc c} 1 & 0 & 0 & 0 & -5 \\ 0 & 1 & 0 & -1 & -10 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 4 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{array} \right]$</p> <p>より, $\begin{cases} x_1 = -5 \\ x_2 = -10 + x_4 \\ x_3 = 4 \\ x_4 \text{ は任意} \end{cases} \text{ である.}$</p>

	誤	正
p.132, 定理 4.6 の証明	(\Leftarrow) 定理 4.4 より, $PAQ = E_n$ となる正則行列 P, Q が存在するので, $A = Q^{-1}P^{-1}$ となり, A も正則であることが分かる.	(\Leftarrow) 定理 4.4 より, $QAP = E_n$ となる正則行列 P, Q が存在するので, $A = Q^{-1}P^{-1}$ となり, A も正則であることが分かる.
p.135, 定理 4.8 の証明の右側	(\Rightarrow) $\text{rank}(A) = \text{rank}(A b)$ ならば,	(\Leftarrow) $\text{rank}(A) = \text{rank}(A b)$ ならば,
p.137, 定理 4.10 の証明	(\Leftrightarrow) 行基本変形行列の積 B に対し,	(\Leftarrow) 行基本変形に対応する基本行列の積 B に対し,
p.135, 定理 4.8 の証明の右側	$\begin{cases} x_1 = -c_{1,r+1}x_{r+1} - \cdots - c_{1n}x_n + d_1 \\ x_2 = -c_{2,r+1}x_{r+1} - \cdots - c_{2n}x_n + d_2 \\ \vdots \\ x_r = -c_{r,r+1}x_{r+1} - \cdots - c_{rn}x_n + d_r \\ x_{r+1}, x_{r+2}, \dots, x_n \text{ は不定} \\ \text{(どんな値でもよい)} \end{cases}$	$\begin{cases} x_1 = -c_{1,r+1}x_{r+1} - \cdots - c_{1n}x_n + d_1 \\ x_2 = -c_{2,r+1}x_{r+1} - \cdots - c_{2n}x_n + d_2 \\ \vdots \\ x_r = -c_{r,r+1}x_{r+1} - \cdots - c_{rn}x_n + d_r \\ x_{r+1}, x_{r+2}, \dots, x_n \text{ は不定} \\ \text{(どんな値でもよい)} \end{cases}$
p.137, 注意 4.3.2	[列交換] $\left[\begin{array}{cc c} 1 & 2 & 10 \\ 3 & 4 & 20 \end{array} \right] \rightarrow \left[\begin{array}{cc c} 4 & 1 & 20 \\ 2 & 3 & 20 \end{array} \right] \Leftrightarrow \begin{cases} 4x + y = 20 \\ 2x + 3y = 20 \end{cases}$ (4.17) と違う!	[列交換] $\left[\begin{array}{cc c} 1 & 2 & 10 \\ 3 & 4 & 20 \end{array} \right] \rightarrow \left[\begin{array}{cc c} 2 & 1 & 10 \\ 4 & 3 & 20 \end{array} \right] \Leftrightarrow \begin{cases} 2x + y = 10 \\ 4x + 3y = 20 \end{cases}$ (4.17) と違う!
p.237, 例 9.1 の解答の空行を埋める, 組版の問題なので間違いではない	p_2 は零ベクトルなので, A の固有ベクトルではない. したがって,	p_2 は零ベクトルなので, A の固有ベクトルではない. したがって,

	誤	正
p.248, 定理 9.11	${}^tUHU = \begin{bmatrix} \lambda_1 & & & \\ & \lambda_2 & & \\ & & \ddots & \\ & & & \lambda_n \end{bmatrix}$	$U^*HU = \begin{bmatrix} \lambda_1 & & & \\ & \lambda_2 & & \\ & & \ddots & \\ & & & \lambda_n \end{bmatrix}$
p.262, 脚注の 下から2行目	グラム・シュミットの直交化を行えば, $Au_1 = \lambda u_i (i = 1, 2, \dots, \mu)$ を満たし,	グラム・シュミットの直交化を行えば, $Au_i = \lambda u_i (i = 1, 2, \dots, \mu)$ を満たし,
p.271, 演習問 題1.2(5)の解 答	(5) $= \{c\}$	(5) $\{c\}$